

保育における音楽活動から教科「音楽」への連続性に関する一考察

—音・音楽・声の聴取経験を中心に—

A study on the continuity from music activities in childcare to a subject “music”: Around the attentive hearing experience of sound, music and voice

長島 礼* 五味 克久**

Rei NAGASHIMA* Katsuhisa GOMI**

要約：本研究は、就学前教育における音楽活動から小学校の教科学習としての「音楽科」への連続性について、特に音楽教育の基盤と考えられている、「聴く」という経験に焦点を絞り考えようとするものである。調査1では、既刊の5冊の保育内容「表現」のテキスト類を「保育」と「音楽」に関する4つの視点から整理・分析し、特に、音や音楽、声に傾聴することについての捉え方を示す。また、調査2では、2008年告示小学校学習指導要領解説「音楽編」の「第3章 各学年の目標及び内容」より、第1学年及び第2学年について、音や音楽、声を聴くという行為に関する記述を抽出・整理し、「A表現」及び「B鑑賞」領域において、音・音楽・声を聴くという行為がどのように位置付けられているのかを検討する。

その結果、就学前教育においても教科「音楽」においても「音や音楽を注意深く聴く」経験を通して聴取能力を養うことが重要視されていた。幼児期の遊びを中心とした日常生活において、音に耳を傾けることや、耳を澄まし音を発見する経験などを豊富に行い聴く耳を鍛えることは、教科「音楽」の「歌唱」や「器楽」「鑑賞」において仲間の声や演奏に傾聴する耳、音楽を聴き取る耳へと継続して養われていくだろうし、豊富な聴取経験によって蓄積されたこだわりの音は「音楽づくり」に発展していくだろう。

キーワード：保育における音楽活動、小学校における教科「音楽」、音・音楽・声の聴取経験

はじめに

本稿は、就学前教育における音楽活動から小学校の教科学習としての「音楽科」への連続性について、特に音楽教育の基盤と考えられている、「聴く」という経験に焦点を絞り考えようとするものである。その理由は、就学前教育における音楽活動において、子ども達が音や音楽、人の声を聴くという経験をどのように行い楽しんでいるのか、また、その経験の蓄積が小学校の教科としての音楽科の授業とどのように繋がっていくのか、ということ明らかにしたいと考えたからである。

本研究では、まず、保育の場における音楽活動の捉え方を示し、特に音や音楽、人の声の聴取経験が、音楽活動のなかでどのように位置づけられているかということを考察する。そして次に、小学校における教科「音楽」についても同様に、音や音楽、人の声の聴取経験がどのように捉えられているのか整理し、双方を照らし合わせることを通して、就学前教育における音楽活動から小学校における教科「音楽」への連続性のあり方を検討していく。

I. 調査1 保育内容「表現」のテキスト分析（音楽的側面を中心に）

I-1. 目的と方法

長島(2014)¹⁾は既報にて、1989年告示の「幼稚園教育要領」および1990年通知の「保育所保育指針」の領域「表現」において、音楽活動に関する記述を抽出し、ねらい／内容／内容の取扱い及び配慮事項の3項目に分けて分類し、「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」において、音楽活動に関する事柄がどのように捉えられているのか整理・検討した。そしてその結果、①「音楽—子ども—保育者」の関係、②「音楽—子ども—音」の関係、③「音楽—子ども—イメージ」の関係、④「音楽—子ども—表現」の関係といった4つの視点を見出した。本稿では更に、下記の5冊の保育内容 領域「表現」のテキスト類において、前述した4つの視点がどのように取り扱われているのか整理・検討し、幼稚園および保育所における音楽活動の捉え方やあり方について考察する。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士後期課程

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究所教授

(2015年3月31日 受付)
 (2015年4月15日 受理)

【調査対象のテキスト】

- ① 森上史郎・吉村真理子・飯島千雅子編著（1996）『高杉自子・森上史郎 監修 演習保育講座10 保育内容 表現』光生館
- ② 大畑祥子編著（1997）『保育内容 音楽表現の探究』相川書房
- ③ 黒川建一編（2004）『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房
- ④ 無藤隆監修 浜口順子編者代表（2007）『事例で学ぶ保育内容 領域表現』明文書林
- ⑤ 岡健 金沢妙子編著（2009）『演習 保育内容 表現』建帛社

I-2. 結果と考察

(1) 「音楽—子ども—保育者」の関係について (表1)

「音楽—子ども—保育者」の関係については、5冊の文献に共通して多くの記述があり、その内容は以下の3項目に大別できる。

- ① 「音楽」と「子ども」の関係を支える「保育者」の役割
- ② 「音楽」を介した「子ども」と「保育者」の関係
- ③ 「音楽」を介した「子ども同士」の関係を支える「保育者」の役割

(1) -① 「音楽」と「子ども」の関係を支える「保育者」の役割

「音楽」と「子ども」の関係を支える「保育者」の役割については、5冊の全てのテキストに記述が見られた。

まず、環境を構成する保育者として、また、子どもが音楽に出会うための援助者としての保育者の役割については、いうまでもなく、一人一人にとって無理のない、心身の発達に応じた経験を提供することが基盤になるとされている。その上で、大畑（1997）は、「保育者の投げかけた音楽表現は、一回の活動や一定の期間で完結するのではなく、一人ひとりの子どもたちの中で芽となり、その子なりの表現として膨らみ再生されることに意義がある。その過程はさまざまで、時間的にもずれがある。必ずしも保育者の投げかけが、その子にとって意味があるとは限らない。そのことも含めて、個々の子どもの受けとめ方を認め、見通しをもってかかわることが必要だ (p.116)」とし、「何よりも、子ども自身が音楽の『つくり手』であり『にない手』であるということを理解しておかなくてはならない (p.80)」としている。保育者が、歌ったり踊ったり楽器を奏でたりしながら、子どもと共に楽しい音楽経験を重ねることが大切であり、保育における音楽活動では、子ども達の音楽的スキルを高めることが「ねらい」になるのではなく、「楽しさを支えている音楽的な能力の育ちを捉えることを重視したい (岡2009, p.82)」としている。さらに、岡（2009）は、「保育者が主導しても、その過程でそれが子どものものとなっていくことで、子どもの体験と楽しみ方の幅も広がっていく。(p.67)」と述べており、また、大畑（1997）も、「『懂れ』という自然な感情をもって練習に励む子どもたちの姿であれば、例えば発表会に向けた合奏という『自律』が求められる音楽活動であっても、子どもにとって意味のある活動になるであろう (p.117)」としている。保育における音楽活動は、子どもの主体的な活動でなければならないということが示されており、保育者には、子ども達が主体的に活動できるように援助することが求められている。

(1) -② 「音楽」を介した「子ども」と「保育者」の関係

「音楽」を介した「子ども」と「保育者」の関係についても、5冊の全てのテキストに記述があった。森上（1996）は「音や音楽を共有する遊びを通して、新しい人間関係が生まれたり、人間関係が変わったりすることもある (p.17)」と述べ、また、大畑（1997）は、「歌や言葉、表情などの表現を通して保育者は子どもを理解し、また保育者自身も何らかの『表現』を通して子どもたちとかわり合っており、(中略) 音楽表現が生活の中に位置づけられるということは、それが子どもと保育者のよりよい関係のために生かされていることである (p.114)」と述べている。つまり、音楽表現はコミュニケーションの手段として捉えられており、お互いを知り認め合う手段として機能しているといえる。そして、自分と相手との関係性によって、表現の程度や内容も変わってくる。

(1) -③ 「音楽」を介した「子ども同士」の関係を支える「保育者」の役割

「音楽」を介した「子ども同士」の関係を支える「保育者」の役割では、5冊中2冊に記述があった。岡（2009）は、「保育者は入念な環境構成の主体であると同時に、その場で表し合い受け止めあうネットワークの構成員であること。そして、子どもが仲間と関わる中で自他ともに認め合える関係を築けるよう促す役割がある (p.48)」と述べている。つまり、保育者は音楽活動において、子ども達が自分を知り相手を認めるといった経験を重ねていけるよう援助していく役割を担っている、ということである。また、自他ともに認め合える関係は信頼関係があってこそであるから、保育者は、日常生活全般においても、子ども達がお互いに信頼関係を結ぶよう支援していく役割を担っている。

(2) 「音楽—子ども—音(声)」の関係について (表2)

「音楽—子ども—音(声)」の関係については、5冊の全てのテキストに記述があり、それらの内容は以下の3項目に大別できる。

- ① 「子ども」と「音」の出会い
- ② 「子ども」と「音」の出会いを支える「保育者」の役割
- ③ 静寂について

(2) -① 「子ども」と「音」の出会い

「子ども」と「音」の出会いについては、5冊の全てのテキストに記述がみられた。それらの内容は、聴覚機能の発達に関する内容と、乳幼児が音を鳴らして楽しんでいる様子についての事例紹介、そして、我々が音楽を身体的に知覚しているという、音楽と人との関わりの特徴についての記述であった。森上（1996）は、「乳児は視野に入るものに触れるものは何でも周囲の大人が根負けするほどの興味と探究心と集中力を示し、手当たり次第に叩いたり破ったりする。その興味の中には音への好奇心を示す部分もある。反応を見ては次々と対象物を代えていく様子は、あたかも音の違いを確かめながら楽しんでいるように見える。(中略) 音の速さや、リズム、強弱等に興味をもったり、何度も何度も発見と試行を繰り返しながら、音の世界への興味は深まりと広がりを見せていく (p.138)」と述べ、乳児が主体的に音探索をする様子を

分析している。また、黒川 (2004) は「人にはみんな個性があり、音や音楽に対しても好き嫌いがあるのは誰もが実感しているとおりです。その音への嗜好はかなり小さい頃から芽生えているようです。(中略) 生まれつきの性格や家庭環境の違いによって、乳幼児が反応する音もそれに対する表現の仕方も違ってきます (p.108)」と述べている。そして、このような音探索の経験について、黒川 (2004) は、「音の表現の根底には耳を澄まして音を聞く体験がなくては、ただガチャガチャ楽器を鳴らすだけになってしまいます。こんな音探しや音の発見の経験は音に対する聞く耳を育てるものだと思います (p.117)」と述べている。

(2) -② 「子ども」と「音」の出会いを支える「保育者」の役割

「子ども」と「音」の出会いを支える「保育者」の役割については、5冊中2冊のテキストに記述がみられた。森上 (1996) は、「音楽的表現活動」として、歌ったり、奏したりという活動を中心に考える傾向がある。しかし、音楽的活動の第一歩は、「聞く」ことから出発する。(中略) 人がどんな音の中で生活しているのか、音をどんなふうに使っているのか、日常の生活に目をむけ、そこから音のこと、音楽のこと、表現のことを考えてみる必要がある (p.36)」と述べている。そして「子どもが試行錯誤しながら音を作りだしていけるよう、多様な素材に自由に触れることができる環境と、十分な時間の確保、失敗が許される場であることが必要 (p.140)」としている。また、黒川 (2004) は、「いろいろな音を発見しおもしろがることから、好きな音へのこだわりをもつ感覚を子どもの中に育てることによって、表現力のセンスは磨かれるのではないか (p.124)」としている。つまり、音をよく聴き味わい、自分が鳴らす音にこだわりをもつことが音楽表現の出発点だとしている。

(2) -③ 静寂について

静寂については、5冊中1冊のテキストに記述があった。ここでは、物理的な静寂と精神的な静寂について示されており、森上 (1996) は、「我々は、騒音を騒音と感じない、必要のない音が充ちている日常の中で何の疑問も抱かず生活している (p.81)」と指摘し、また、「全神経を集中させて何かに取り組んでいる時にこそ本来の静寂があり、そのとき感じている充実感は何にも替えられない (p.83)」と述べている。没頭し自分と向き合うことによってのみ得られる、満ち足りた精神状態について述べられ、そのような集中できる環境設定の重要性が示唆されている。

(3) 「音楽-子ども-イメージ」の関係について (表3)

「音楽-子ども-イメージ」の関係については、5冊中4冊のテキストに記述があり、それらの内容は、以下の2項目に大別できる。

- ① 音や音楽の知覚と音のイメージ
- ② イメージの世界で遊ぶ子どもの姿と音楽

(3) -① 音や音楽の知覚と音のイメージ

音や音楽の知覚と音のイメージについては、5冊中1冊のテキストに記述が見られた。大畑 (1997) によると、「音は聴覚のみで

知覚されるのではなく、その時の身体的・精神的状況、あるいは視覚や触覚、嗅覚などがとらえた諸感覚と一緒に体験され、音のイメージとして記憶される」とされ、「この音のイメージは成長とともにさまざまな体験をすることで、更新され続け、個人的な体験を通して蓄えられる音のイメージは、基本的に人によって異なるもの (p.32)」であると述べられている。つまり、音は他の諸感覚と共に知覚されるものであり、また、ある音や音楽に対する我々のイメージは、個々様々であり、イメージの豊かさは経験の豊かさと深く関係している、ということである。

(3) -② イメージの世界で遊ぶ子どもの姿と音楽

イメージの世界で遊ぶ子どもの姿と音楽については、5冊中4冊のテキストに事例とともに紹介されていた。子ども達が、自らの経験をもとに、想像力を駆使して見立てやごっこ遊びを展開させ遊ぶ姿はよく見られる姿だが、音楽はそのイメージをより豊かに膨らませる要因となる。また、言葉の響きを楽しむ子ども達の姿として、「一見、意味をもたないように感じる言葉であっても、それが子どもたちの間でやりとりされ、何度も繰り返される場面を目にすると、その言葉のひびきを楽しんでいるとともに、そこから喚起されるイメージを伝え合い、面白がっているようにも感じられます。(大畑1997, p.34)」というように、子ども達が、言葉のリズムやニュアンス、響きに興味を惹かれ楽しむ特性をもつことが示されている。

(4) 「音楽-子ども-表現」の関係について (表4)

「音楽-子ども-表現」の関係については、5冊の全てのテキストに記述があり、それらの内容は以下の5項目に大別できる。

- ① 音楽表現の基盤
- ② 歌うこと
- ③ 器楽演奏
- ④ 身体表現
- ⑤ その他 (子どもの音楽表現について)

(4) -① 音楽表現の基盤

音楽表現の基盤については、5冊の全てのテキストに記述が見られた。無藤 (2007) は、「園生活の中で子どもたちは、色、形、歌 (音とリズム)、動き、手触りなどのさまざまなものを表現として味わうということである。(中略) 子どもはそれぞれのものもつ性質を生かしながら遊びに取り入れたり、味わうことそれ自体を遊びとして楽しんだりする。それは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった五感を通してからだ全体で経験されるものになる。そして、そのような経験の中で子ども自身も形をつくったり、歌を歌ったり、からだを動かしたりと、知らず知らずのうちに表現を行っているといえる。周囲のものを味わう感性の豊かさが表現することの基盤となるのである。(p.92)」述べ、子どもの思いや考えが表現される過程を分析している。このような子どもの表現の中でも、特に音楽表現に焦点を当てると、前述したように音や音楽に耳を傾けること、すなわち聴取経験が音楽表現の出発点となることがわかっている。音や音楽は子どもの中に蓄積され、自らの音楽表現の素材や表現手段として咀嚼されて、その子どもの

ものとなって表れる。

また、「クラスで歌ったり、合奏したり、リズム遊びをしたりすることは、集団生活でしか味わえない音楽的表現であり、そこで体験した音楽や表現方法は、自分たちがつくり出す音楽表現の『材料』となる(岡 2009, p.80)」と述べ、集団での音楽経験が個人的な音楽表現を豊かにする、としている。

(4) - ②歌うこと

歌うことによる表現については、5冊の全てのテキストに記述があり、生後2か月頃から3歳頃までの、子どもが歌をうたいたず成長の過程や、歌うことによる快の効果について、また、つぶやき歌についての内容が見られた。子どもは、遊びに夢中になっている時や開放的な気分の時に自然と歌を口ずさむ。その歌は必ずしも既存の歌ではなく、自作の歌であることもあるし、オノマトペで歌われたり、替え歌であったり鼻歌であったりする。無藤(2007)は、このような子どもの歌う姿から、「歌をうたうという行為は、子どもの生活と密接につながり、子どものその時の気持ちを最大限に表現する手段である(p.83)」と述べている。また、仲間と一緒に歌う経験は、一体感が得られ喜びや楽しさを一層味わえる経験となる。

(4) - ③器楽演奏

器楽演奏については、5冊中1冊のテキストに記述が見られた。森上(1996)は、「楽器による表現は、歌うことに比べて、より意識的な活動と考えられるのではないか」としている。つまり、自分の思いを表現する過程において、楽器という道具を試行錯誤しながら操作し音として産出していく過程には、歌うことと比べて、子どもの意志が一層働いている、ということである。技術偏重にならず、子どもの発達段階に適し、子ども達が自らの演奏を楽しみ、喜びあえる体験となるよう配慮が必要である。

(4) - ④身体表現

身体表現については、5冊中3冊のテキストに記述が見られた。黒川(2004)は乳幼児の身体表現について、「身体の使える機能その時々ですべて使って気持ちを表現しているようだ(p.117)」と分析するとともに、「まだことばを充分に獲得できていない乳児たちが、好きな音楽や歌やことばの刺激に対し、満面に笑みをたたえて全身を揺らしてその楽しさを表現している様子はよく見かける(p.119)」と紹介している。また、岡(2009)は、「歌や楽器による音楽演奏は、子どもたちの身体に同調を喚起する。知っている歌や器楽曲の演奏が聞こえてくるといつのまにか歌いだしたり、思わず身体でリズムを取ったりしてしまうことは少なくない(p.113)」と述べ、日常生活において、子ども達が音楽(特にリズム)を通して協同的な音楽表現を行っていることが示されている。さらに、岡(2009)は、「子ども達の身体表現を客観視すると、子ども達がただ音楽に合わせて身体表現しているのではなく、歌詞の意味を理解し歌を味わっている姿がみられる(p.56)」としており、つまり子どもの身体表現は、子どもの内面を探究する手掛かりになるということが示されている。

(4) - ⑤その他(子どもの音楽表現)

子どもの音楽表現については、5冊中3冊のテキストに記述が見られた。まずは、「子ども達の音楽表現が、保育者の見ていないところでも行われている(無藤 2007, p.125)」事例が紹介され、子ども達が日常生活のあらゆる場面で音楽的な活動を展開していることが指摘されている。また、大畑(1997)は、「子どもは往々にして、大人が意図している側面とは別の側面に興味をもち、それを遊びの中で再現させたり発展させたりすることがある(p.16)」と述べており、我々が計画した活動の多くが、子ども達の興味やアイデアによって肉付けされ、彼らの主体的な活動へと展開されていくことについて述べられている。子ども達は主体的に毎日を生きている。子ども達が何をしたいと欲しているのか、何に興味関心を寄せているのか、ということ把握し環境を整えることが、子ども達の主体的な活動(生活)がより充実したものになる。音楽表現についても同様である。

また、岡(2009)は、子どもは、「成長とともに自分の表現を対象化できるようになると、表現方法の工夫や技術の修得に関心を向けるようになり、それが、自ら技術指導を求めたり練習したりする態度につながる(p.83)」と述べている。出来なかったことが出来るようになる経験は、大きな喜びと自信をもたらす。出来るようになった時の喜びを知るからこそ、次も努力できる(頑張れる)のである。その為には、一人一人の子どもの心身の発達に即した内容と活動の進め方を吟味しなければならない。

II. 調査2 教科「音楽」における聴取経験の位置付け

II-1. 目的と方法

2008年告示の小学校学習指導要領解説「音楽編」によると、音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」と示されている。小原、山本他(1997)は、この目標を実現するためには、「子供一人一人が、音楽の基礎的・基本的な内容を身に付けることはもとより、内発的な学習意欲や、主体的な態度に支えられた自主的、自立的な音楽活動を求め続ける心情を育てることが大切である。(中略)音楽活動を通して、子供と音楽の創造的なかかわりを深める学習指導を実現することが重要な課題となる(p.31)」と述べており、教師が一方的に指導する「教える」教育から、子供たちが主体的に考え判断し行動できるよう支援する「子どもが主体的に学ぶ」教育への変換が求められている。

以上を踏まえ、2008年告示の小学校学習指導要領「音楽」では、これまでのように、内容を「表現」及び「鑑賞」の2領域で構成し、「表現」及び「鑑賞」に関する能力を育成する上で共通に必要な[共通事項]を新たに設けた。また、歌唱教材や鑑賞教材の充実を図るとともに、音楽づくりや鑑賞においては、児童の思いや意図を尊重しながら、音楽を作ったり意見を述べたりできるような内容の改善が図られた、としている。

調査2では、2008年告示小学校学習指導要領解説「音楽編」の「第3章 各学年の目標及び内容(特に第1節 第1学年及び第2学年の目標と内容)」より、「音や音楽、声を聴く」という事柄に関する記述を抽出・検討し、A表現における「歌唱」、「器楽」、「音

楽づくり」とB鑑賞における「鑑賞」の4分野において、音や音楽、声を聴くという聴取経験がどのように位置づけられているのか考察する。

II-2. 結果と考察(表5)

(1) A表現「歌唱」における聴取経験の位置付け

低学年の歌唱活動のねらいは、「聴唱・視唱の能力、音楽を感じ取って歌唱の表現を工夫する能力、楽曲に合った表現の能力、声を合せて歌う能力を育てていくこと」とされている。特に「音楽を聴いて演奏する能力は、様々な音楽活動の基盤となるものであるから、低学年の実態を踏まえてしっかりと聴唱の能力を育てる必要がある」とされている。そしてそのためには、「教師や友達が歌うのを聴いてまねて歌ったり、楽曲を聴いて感じ取ったことや想像したことを言葉や体で表したり友達と伝え合ったりしながら、表現を豊かにしていく活動を通して、表現を工夫する楽しさを味わうようにすることが大切である」とある。また、「歌唱の活動を通して正しい音程やリズムなどに対する感覚を養うようにするとともに、伴奏の響きをよく聴いて歌う活動を通して、調和のとれた歌唱の表現をするための素地を養っていくことが大切であり、様々な活動の中で、児童が友達の歌声や伴奏の響きを聴きながら自分の歌声にも意識を向け、心を合せて歌おうとする意欲を育てるとともに、共に歌う楽しさを感じることができるようになることが大切である」とされている。

つまり、音楽を聴いて演奏する能力が様々な音楽活動の基盤となることを押さえた上で、「歌唱」の分野では、歌唱に関連する様々な活動の中で、児童が教師や友達の歌声や伴奏の響きを聴く経験が、自らの歌声にも耳を傾け歌唱表現を工夫しようとする動機になるとともに、心を合せて歌おうとする意欲を育て、共に歌う楽しさを体験することに繋がっていくということが述べられている。

(2) A表現「器楽」における聴取経験の位置付け

低学年の器楽活動のねらいは、「聴奏・視奏の能力、音楽を感じ取って器楽の表現を工夫する能力、楽曲に合った表現の能力、音を合せて演奏する能力を育てていくこと」とされている。特に「聴奏の能力は、様々な音楽活動の基盤となるものであり、低学年の実態を踏まえてしっかりと聴奏の能力を育てる必要がある」とされている。そしてそのためには、「模範演奏を聴いたり、自分の音だけではなく友達の楽器の音や伴奏を聴きながら演奏する経験が必要である」と述べられている。

つまり、歌唱活動と同様、音楽を聴いて演奏する能力が様々な音楽活動の基盤となることを押さえた上で、「器楽」の分野では、器楽に関連する様々な活動の中で、児童が教師や友達の演奏や伴奏の響きを聴く経験が、自らの演奏にも耳を傾け表現を工夫しようとする動機になるとともに、心を合せて演奏しようとする意欲を育て、合奏する楽しさを体験することに繋がっていくということが述べられている。

(3) A表現「音楽づくり」における聴取経験の位置付け

低学年の音楽づくりの活動のねらいは、「音のさまざまな特徴に

気付く能力、音を音楽に構成する能力を育てていくこと」とされており、「耳を澄まして音を聴き、音の出し方や組み合わせを工夫し、音楽の仕組みに着目してそれを手掛かりに音を音楽へとしていく活動を行うことなどが大切なこととなる」と述べられている。

つまり、日常生活における様々な音を意識して聴き、音やリズムを発見することを出発点に、それらを咀嚼し、こだわりの音やリズム、メロディーとして自分のなかに蓄積し、最終的に音楽の仕組みに則って音楽へまとめあげる能力の育成について述べられている。

(4) B鑑賞「鑑賞」における聴取経験の位置付け

低学年の鑑賞の活動のねらいは、「楽曲を全体にわたって感じる能力、楽曲の構造を理解して聴く能力、楽曲の特徴や演奏のよさを理解する能力を育て、音楽を聴くことに親しみをもつようにすること」とされている。低学年では、「音楽を形づくっている要素に興味・関心をもち、注意深く集中して聴く習慣を身に付け、音楽を聴く楽しさを味わうようにすることが求められる。」また、その際、「音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを教師や友達など身近な相手に伝えようとする気持ちを育てることも重視するべきだ」と述べられている。

つまり、低学年では、音楽を注意深く集中して聴く習慣を身に付けることと、音楽を聴く楽しさを味わうようにすることが求められている。また、音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを仲間に伝えようとする気持ちを重視し、個人的な聴く活動に留まらず、他者との関わりを通して、様々な聴き方を体験できるように留意されている。

III. 全体的考察

III-1. 保育での音楽活動と小学校の教科「音楽」における聴取経験の位置づけ

まず、領域「表現」のテキスト類の音楽的側面に注目し、4つの視点に基づいて整理・分析した結果、保育における音楽活動は、子どもの主体的活動であり、その音楽表現は、子ども同士や子どもと保育者のコミュニケーション手段として捉えられていることが示された。そして、「周囲のものを味わう感性の豊かさが、子どもの表現することの基盤になる」とされており、音楽的活動の第一歩は「聴く」ことから始まり、自分が鳴らす音にこだわりをもつことが音楽表現の出発点になるとしている。その為、保育者には、子ども達が生活や自然環境における様々な音に気づき、その音の世界を楽しめるよう、環境構成の主体となって支援していくことが求められている。つまり、保育における音楽活動の特徴は、様々な音に注意深く耳を傾ける、という経験を積むことと、音や音楽を用いた自己表現への意欲を高め、また、表現のための技法を豊かにする、ということが重視されているといえる。そして、これらを、幼児教育の原点である「遊び」の中で、経験していくことが望まれている。

また、一方の、第1学年及び第2学年における教科「音楽」でも、音や音楽の聴取経験が、様々な音楽活動の基盤になると位置づけられている。「歌唱」や「器楽」では、他者の歌や演奏を聴取する経験を通して、そのよさに共感したり認めたり、自分の声や

演奏にも意識を向け、自分の表現を工夫し理想とする形に近づきたいという欲求を生じさせるとともに、合唱や合奏において仲間との一体感を生み出すことに繋がるとしている。また、「音楽づくり」では、音素材となる音を聴取する過程で、日常生活で普段意識していない音やリズム、メロディーとの出会いがあり、音の様々な特徴に気付いたり、一つの音素材から様々な音が出せることなどに気付き、音の面白さを味わい、感性を豊かにする経験へと繋がるとされている。そして、「鑑賞」では、音楽を形づくっている要素に興味・関心をもち、注意深く集中して聴く習慣を身に付け、音楽を聴く楽しさを味わうことがねらいとして示されている。このように、保育内容「表現」のテキスト類や小学校学習指導要領解説「音楽編」では、「音や音楽を注意深く聴く」という聴取経験が、音楽教育の基盤になると示されており、「音や音楽を注意深く聴く」経験を通して聴取能力を育むことが、一貫して重要視されている。

Ⅲ-2. 保育における音楽活動から小学校の教科「音楽」への連続性

次に、保育における音楽活動から、小学校の教科「音楽」への連続性について、特に「音や音楽を聴く」という経験について検討していく。

保育における音楽活動（保育において遊びを通して経験する、音や音楽を聴いたり、歌ったり、楽器を鳴らしたり、身体表現をすること、また、それらを組み合わせた活動）を、小学校の教科「音楽」に繋げていくには、保育における音楽活動を、教科「音楽」との連続性を視野に入れ見通しをもって計画することが重要である。また、保育における音楽活動の在りようを把握したうえで、教科「音楽」を考えていく必要がある。

保育において、無藤（2013）は、「音環境を考える時に、『物理的な意味でいう音』『音楽』『人間の声』の大きく3種類の音があり、それらはさらに、『届く音』『包む音』『返る音』に分けられる（p.47）」と述べ、「幼い子どもの経験として、さまざまな音や声にかかわる経験が必要で、その目指すところは、私達の世界が視覚的に見えるものだけでなく、聴覚をベースにした時、あらゆるものが様々な音を常に出していて、そこに気付かせていくということである。『音楽』というジャンルより手前の、人間経験の基盤として『届く音』『包む音』『返る音』は位置付けられるのではない（p.70）」と述べている。つまり、日常生活において音や音楽、声に意識を向けることの意義を説き、保育者には保育実践における音や音楽、声の用い方を吟味することの大切さを示している。子ども達が、生活や遊びの中で、様々な音・音楽・声に耳を傾ける態度を育み、音を発見する経験を通して音への興味・関心を抱けるよう望まれている。

また、岡山大学教育学部附属小学校かけはし学習研究会（2006）の研究報告によると、本書における子どもの実態調査では、「5歳後半から1年生の子どもは認識力や感性などの水準が高くなります。（中略）そのため単に事物や現象にふれることのおもしろさに気づくのではなく、事物や現象の特徴を、おもしろさ・不思議さ・便利さとして感じ取るようになり、感じ取った事物や現象の特徴を生かしながら、その事物や現象にかかわっていききたいという（中

略）事物や現象の「価値」に気づいた行動をしている姿が見られるようになります（p.21）」と述べられている。つまり、これを聴取経験に置き換えると、子どもの聴取能力は成長と共に質的に変化し（気づきが深まる）、そして気づきが深まるだけでなく、成長と共に、その音への興味・関心を、それらを生かす取り組みへと発展させていくことができるようになってきている。これらを鑑みると、幼児期での遊びを中心とした日常生活において、音・音楽・声に耳を傾けることや、注意深く耳を澄まし音を発見する経験などを豊富に行い、注意深く聴く態度（気づく態度）を身に付け、そのようにして聴く耳を鍛えておくことが、質的に深化しながら、教科「音楽」の「歌唱」や「器楽」「鑑賞」において、仲間の声や演奏に傾聴する耳、音楽を聴き取る耳へと継続して養われていくだろうし、豊富な聴取経験によって蓄積された面白い音や、こだわりの音（音楽・声）は、音楽を構成する要素と相まって「音楽づくり」に発展していくのではないだろうか。

注釈

- 1) 長島 礼（2014）「保育におけるリトミックの意義に関する一考察—幼稚園教育要領・保育所保育指針における音楽とリトミックの比較分析—」神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要 第8巻第1号 pp.199-210

【参考文献（調査1、2で使用した以外の文献）】

- 岡山大学教育学部附属小学校かけはし学習研究会著（2006）『学校が大好きな1年生をめざして』東洋館出版社
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校 子どもの発達教育研究センター著（2008）『接続期をつくる 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働』東洋館出版社
- 小原光一、山本文茂監修1997『音楽教育論—子供・音楽・授業・教師—』教育芸術社
- 無藤隆著（2013）『幼児教育のデザイン 保育の生態学』東京大学出版会
- 吉永早苗（2012）「幼児期における音感受教育」白梅大学大学院子ども学研究所博士課程 学位論文

表1 「音楽—子ども—保育者」の関係についての記述

<p>高杉白子・森上史郎 監修 演習保育講 座10 保育内容 表現 1996 森上史郎・吉村真理子・飯島千麻子編著 光生館</p>	<p>保育内容 音楽表現の探究 1997 大畑祥子編著 相川書房</p>	<p>保育内容「表現」2004 黒川建一編 ミネルヴァ書房</p>	<p>事例で学ぶ保育内容 領域表現 2007 無藤隆監修 浜口順子編者代表 萌文書林</p>	<p>演習 保育内容表現 2009 岡健 金沢妙子編著 建帛社</p>
<p>うたったり、わらべうた遊びをするとき は、子どもの身体動きやことばに合わせ てゆったりと繰り返しながら相手をし てやることが大切である。(p.31) そうした技術的なものは、これまでの遊 びの中で学習してきたのであるが、それ には、保育者がその時期に合わせて発達 に応じた経験活動を提供してきたからで ある。(p.35)</p> <p>子どもの心が動くのは、その心身にかな ったものに触れるとき、自分もともに感 じ享受できるときである。それは時に有 名音楽家の演奏や名曲を聞いたときであ るかもしれないが、保育者や仲間と一緒 に歌ったり楽器の演奏に興じたたりす きかもしれない。また鳥や虫の鳴く声、 海辺の波、雨、風の音かも知れない(p.37)</p> <p>保育者には子どもの心の深いところに響 えられていく声や音楽についての経験を 大切にするのが求められる。(p.37)</p> <p>子どもは両親や家族、周りの人から愛情 を注がれて育つ。その愛情を伝える、あ るいは愛情が伝わる手段の1つに歌があ る。(中略)また、人の肉声にはその人独 特の響きやリズム、流れがある。話や歌 を聞いたとき、絵本を読んでもらったり ることを通して、その人に触れる経験と なる。特に保育者や家族の肉声を通して とつけられる歌やお話の世界には、子ど もへの愛情が込められているので、子ど もは音声を通じて、それを感じ取ること になる。(p.37)</p> <p>「子どもだって十分に歌えるんですよ」 「今の子どもは音感もよくなくたっていい から」と幅広い音域、難しい半音、激し いリズムを持った歌を好んで選んで保育者 がいえるが、たとえ歌うことができたとし ても、このような指導は子ども自身の心身の 発達に見合った対応とは考えがたい。 (p.41)</p> <p>子どもは自分に与えられたいろいろな力 を動員して歌おうとする。保育者は子ど</p>	<p>音や音楽を共有する遊びを通して、新し い人間関係が生まれたり、人間関係が変 わったりすることもあります。(p.17)</p> <p>表現は、人と人のかかわりの中にあり、 かわりの中で変化していきいます。さき 子のように無意識に出ていた音に意識 的に変わったりするなど、その過程でさま ざまに変化したります。(中略)人と人 のかかわりのあり方が、一人ひとりの 表現を規定していく(p.18)</p> <p>音楽的な体験は、子どもと他者(他の子 どもや保育者)とのかわり合いの中に 切り離せない形で入り込み、意味を編み 出したたり、意味が変容したりしています。 同時に、子どもと他者とのかわり合い もまたさまざまに意味での音楽的体験に 編み直したりしています。(p.21)</p> <p>「一定の条件にあてはまる音響が歌であ る」という固定的なもののさがなくなり、 音を仲立ちにして人と人とのかわりに 基づいて心を働かせながら、そこに生ま れた音の意味を受け止め、という開か れた態度に変わって行きます。(p.74)</p> <p>一つ一つの場面で大人たちは、子ども の表現を一生懸命に受け止め、それに自分 が能動的にかかわりながら、子どもが自 現を一生懸命に受け止め、それに自分が 能動的にかかわりながら、子どもの内面 の表れとしての音の意味づけを、子ども と共にじっくり出しているのです。そこ は同時に、大人たちの内面の表現もある はずで、(p.76)</p> <p>子どもは表現に対して保育者が共感的な かわりをする中で、子どもの興味を より発展させたリイメーجزを膨らませた りしていくことは多いでしょう。(p.86)</p> <p>表現はかわり合いのあり方によって規 制されたり、定着したり、というように 拘束されることがあります。(p.88)</p> <p>この事例の保育者は、いわゆる既成の楽 曲を楽譜どおり再生産することのみを音</p>	<p>子どもの気持ちを読み取ることのでき る大人がそばに安心して、子どもは 自分の思いを安心して表すことができ ようになるでしょう。(p.107)</p> <p>保育者は、その小さな表現を見逃さず 汲み取って、そして一緒に味わうこと が大切でしょう。(p.108)</p> <p>M児は、気持ちの中では先生と一緒に うたっているのです。それはM児の嬉 しそうな笑顔と、ずっと上下に膝を屈 し伸ばして拍手をとっている様子からよ くわかります。(p.111)</p> <p>ある保育者は、午睡のときには日本の 昔の唱歌などをよくうたうのだと話し てくれました。子どもは好きなアニメ の歌などをうたうと目が輝いて興奮し たことにはわかりにくく、曲想は優 しい感じの曲を選ぶのだそうです。(中 略)歌は心が安定していいというたえ ないものだから(中略)おとなにとつて も子どもの心を解放しつけるときの歌は、 毎日の忙しい子育ての合間に自分の心 の状態を、歌のうたえらるような落ち着 いた状態にする、いいリラクスといえ ましょう。(p.114)</p> <p>あらぶ歌を聞いて育てば2音が3音が 成るやさしい曲をまずうたい始めら せよう。それは乳幼児にとつてもう たいやすすく望ましい導入だといえま す。(p.114)</p> <p>どのような表現も同じですが、乳児期 からのじつと見たり聞いたりして自分 の中に溜め込む初期の時期を、あせら ずにゆったりと過ごさせてあげたいの です。(p.124)</p>	<p>子どもの動きを「表現」として捉える 際には、その動きと一体となった子ど もも気持ちも含めて考えなくてはな らな重要になる。(p.86)</p> <p>保育者は、子どもが周囲のものを素朴 に味わい、素朴ながらも表現している ものを受け止める存在として重要な役 割を担っている。保育者が子どもと身 もに味わうことは、子どもも自分自身 の経験と共有できたと感じる。そし て、そしてそれを他者の情動や言葉を 介して振り返ることにつながる。そし て保育者のそのようなかわりや、子 どもも「表現する主体」として支える ことでもある。(p.92)</p> <p>保育者が子どもと表現に対して、「上 手・下手」や「元気がない」などの評価 をしない・しなくていい。子どもの評 価をしてしまうと、子どももそれが表 現したいことを理解したうえで、保育 受け止めろのだ。(p.130)</p> <p>保育者もまた表現をする。うたったり おどったり、楽器を奏でたりする。そ の動機は、表現の楽しさを子どもたち に伝えるためだったり、楽しさを共感 するためだったりする。(p.144)</p> <p>表現を、狭い意味で「個」から発する ものと考えず、人との関係性のなかで 生き生きと豊かにしていくことが、と くに幼児期に於いて重要である。 (p.148)</p> <p>子どもたちも保育者も、その場にいる 人が一体となって表現をつくり出して いく楽しさがある。喜びがある。(p.173)</p>	<p>音楽は、身体的同調を引き起こすのであ る。(中略)保育者と乳幼児が日常的に音 楽的な活動をすることは、両者の身体 同調性を高めておくことになり、乳幼児 が意味世界へと参入していくこと(中略) 保育者は入念な環境構成の主体である と同時に、その場で表し合っているあ らうネットワークの構成員でもある。(p.48)</p> <p>「感じる」ことが、環境との重要な点 であるような乳児や生涯をもつ子どもの場 合、音楽や教師の不用意な使用によつて 環境からの刺激が過多になるのを避ける ことは基本的な留意事項である。(p.50)</p> <p>保育者が主導しても、その過程でそれが 子どものものでなっていくことで、子ど もも体験と楽しむ方の幅も広がって いく。こうして、楽しいことを共有す るとは何よりのコミュニケーションであ る。また、(思い思いの活動をしながらも 1つめの歌と一緒に歌っている事例を取り 上げて)口ずさむことで、そこはかとな く連帯感と寂寥感を味わわせるよう なこともある。(p.67)</p> <p>やりとり遊びには、必ず歌と動きがあり、 (中略)こういやりやとり方ができると なるには、間合いの取り方が必要で、ク ラスの気持ちや1つになっていくこと 表れでもあるし、こうしたことを通して、 みんなでも合わせようと他者を気に掛ける ことも生まれる。それは何も既成の歌だ けに限らない。(p.70)</p> <p>保育者が声をかけると、じつと口元を見 つめてまねるようになり、呼びかけ に合わせるように声の調子を変えたり する時もある。(p.75)</p> <p>「トルコ行進曲」は、まだ言葉のないア サミコと行進曲との間のコミュニケーション である。2人が相互に求め合った「会 話」と言えよう。会話の方法が身につ たことで、2人の信頼関係が築かれ、ア サミコとどつて保育者は安心できる場にな</p>

<p>もたち1人ひとりが自分を発揮して心から楽しめよう。保育者は保育者を中心にグループで「歌う」活動は保育者を中心にして、元気がよく、大きな声で、「口」を開けて、導もよくある。みんながそろうって歌っているか、歌詞を正しく歌っているかどうかに気をとられがちである。1人ひとり、がどんなふうにも楽しんで歌っているか、どんな声で歌っているのかに注意を向け、メロディーや言葉、リズムの面白さ、心地よさなどをともに味わい感じながら分かれ合っつる喜びを大切にしたい。子どもが自らを開放し、表現し、そしてともにいる者と互いに楽しめよう促したい。</p> <p>互いに楽しむことは相手の声を聞き相手の表現を受け止めることにもつながる。歌う活動や奏する活動は、心身を刺激し、その発達と密接に関連する総合的な活動である。子どもは身体的、精神的成長発達を個別に知り、1人ひとりにとって無理のない、しかしながら意欲を十分に満たす活動へと援助していく保育者の役割は重い。(p.41)</p> <p>いい歌や悪い歌の判断は相対的なものではない。保育者は子どもともどもいろいろな歌を楽しみ、ひいては保育者自身の音楽の喜びを伝えられる力を備えていたい。(p.42)</p> <p>乳児をひざに抱いてリズムカルな歌を歌いながら身体を動かしてやると、それを喜んで時には声をあげて応答してくれる。最初はこちらが動かしてやるのだが、しだいに自分で身体を動かすようになる。身体でリズムを感じて、身体をあわせて動かし喜ぶ。(中略)歌やあやしてくれるそのリズムを身体で聞き、快く感じているからである。(p.43)</p> <p>「表現」は環境のもとで育まれる。保育者は子どもともその保育者の環境を見る目と環境に働きかける力を持つていたい。(p.82)</p> <p>保育者、あるいは周りの大人の話し声が環境として子どもにも作用する力は大きい。話し声は人のさまざまな感情を運ぶ。(p.83)</p> <p>初めて音のコーナーに来ると、大部分の子どもはいろいろな音を試して楽しむの</p>	<p>楽表現としてとらえられないという点です。(p.101)</p> <p>保育者は音楽的な能力の育ちには意図していないようですが、結果的にはこのように楽しくくここのほり>をうたった経験の積み重ねが、歌唱技術を玉メタリ、リズム感を養うことにもつながります。しかしそれは副次的なものであり、音楽的な要素だけを取り出して「ねらい」とするのは保育にはふさわしくないのです。(p.112)</p> <p>「ねらい」が優先した保育では、音楽表現は保育者の方から「教える」「与える」という一方的なものになりがちです。(p.112)</p> <p>子どもの気持ちは大人に受け止められることにより、表現になるのです。(p.112)</p> <p>見守る保育者の肯定的な温かいまなざし、子どもは間違いないでしよう。(中略)歌(音楽表現)を、子どもと保育者のコミュニケーションの手段としてとらえることでもあり得よう。歌や言葉、表情などの表現を通して保育者自身も何らかの「表現」し、また保育者自身も何らかの「表現」を通して子どもともども何らかの「表現」の通し、このようにならざるを得ないことは、音楽表現の生活の中の意義をより確かなものにします。行事の意義や、特別な時間だけの音楽ではなく、保育者と子どもともども生活に位置づけられる大切なものとして生活に位置づけるので</p> <p>(p.113)</p> <p>本来大人がうたったり、リズムカルな言葉で話しかけたりという行為は、子どもを喜ばせたい、対話をもちたい、という愛情表現から始まったのだと思います。音楽が「教える」ものとして与えられるのではなく、送り手の心情とともに受けとめられるとき、受け手に「表現」として意味あるものになるのです。保育者が自らの表現の動機をこのように意識すること、園生活の中の音楽のあり方が変わってくるでしょう。技術の上手下手や形としてのまとまりより、音楽を媒体とした「気持ちのやりとり」が大切になってくるからです。音楽表現が生活の中に位置づけられるということは、そ</p>	<p>ました。子守唄を歌うことが単に眠らせる方法ではなく、2人の間の会話と考えるなら、保育者にとっても歌うことは楽しいひとことになる。(p.76)</p> <p>2歳児にリズムパターンを唱えさせたり、ただかぜたりすることは難しいが、そのような要素的な学習よりも、遊びの中では生き生きとしたリズムの体験が行われていくことに目をむけたい。(p.78)</p> <p>保育者は活動の区切りや時間の調整をしたい時によく手遊びをする。効果はてきめん、子どもたちも喜ぶのだから一石二鳥である。たしかに「役立つ保育技術」であるが、子どもにとつての面白さはどこにあるのだろうか。(p.78)</p> <p>保育者の過剰なパフォーマンスも不要である。それは保育者に笑わせてもらっているだけであり、子どもが受身になっているとも言える。(p.79)</p> <p>保育者は、子どもの興味や音楽的な能力の育ちに合った教材や指導方法を配感しながら、その子にとつての「楽しさ」を支えていく必要がある。(p.81)</p> <p>保育者は、今の子どもをよよく見ず、昨年の年長児の姿をなぞるような進め方をしてしまつたことを反省した。最初は好きなようにたたかかせているのだが、それは単に次へのステップになつてしまひ、今、楽しんでる姿を認めていなかつた。(中略)その時どきに、子どもが音や音楽にかかわっていることに意味を見出すことができなければ、強制して意欲はなくとも、それは価値の押し付けになる。音楽指導のハワラツターを身に付けて効率がよく音楽をしあけていくことが、保育者の仕事ではない。子どもが楽しいと感じていることを共に味わいながら、楽しさを支えている音楽的な能力の育ちを捉えておきたい。(p.82)</p> <p>音や音楽、またそれを媒体とする物や人とのかわりの中に、新たな価値を見出し、いくことに、音楽表現を通して成長があるのではないだろうか。(中略)保育者には、子どもの中に育っているもの心をとめながら、共に楽しむ姿勢が求められる(p.84)</p> <p>保育者は、積木のよう1つの面に着目して、その気付きを励ます言葉をかけ、自</p>
---	--	---

<p>で、コーナーに集まった子どもたちが自由に楽器に触られるように配慮が必要である。(p.140)</p>	<p>れが子どもと保育者のよりよい関係のためには生かされていることなのです。(P.114)</p> <p>保育者の投げかけた音楽表現は、一回の活動や一定の期間で完結するのではなく、一人ひとりの子どもたちの中で芽となり、その子なりの表現として膨らみ再生されることには意義があるのでしよう。その過程はさまざまですし、時間的にもずれがあります。必ずしも保育者の投げかけが、その子にとつて意味があるとは限りません。そのことも含めて、個々の子どもへの受けとめ方を認め、見通しをもつてかかわられることが必要でしょう。(P.116)</p>			<p>ら音探しをする。ものはたたくと音が出ることで、ものによって出る音が違うこと、床や机など木製は低くて太い、椅子のバンプは高く木製とほだいぶ違う音がすることなど、耳で聞いたり体で感じたりしたことなどを言葉と体で表現して楽しむ。子どもは保育者の動きをよく見ている。参加する子どもが増えることで互いの動きがまた刺激になる。(p.122)</p>
---	---	--	--	---

表2 「音楽—子ども—音(声)」の関係についての記述

<p>高杉自子・森上史郎 監修 演習保育講座 10 保育内容 表現 1996 森上史郎・吉村真理子・飯島千雅子編著 光生館</p> <p>人間は生まれる前から音を聞くことができるという。体内には心臓の鼓動や呼吸などのリズムを持っており、いち早く外界の音やリズムに反応する。(p.30)</p> <p>ヒトは母胎にいる妊娠5か月ごろから音に対して反応するという。すでに「聴く」能力を有しているという。ことなのである。「歌う」原点は産声である。(p.35)</p> <p>音楽表現は音と出会うことから始まる。(中略) 新生児は感覚全体で光や音の刺激に反応する。母親の声には生後3日目で反応したという報告もある。1か月を過ぎるころから乳児は周囲のなじみのある音、ガラガラや音や人間の声に特別な反応を示す。したいに、人の声や物音に心地よさや不安の表情を見せるようになる。一般に音を聞き分けられるのは、生後6か月あたりから認められるとされている。脳の発達と関連して6か月から3~4歳までの間に、特別に音感に関連する能力の基礎ができあがるとする研究報告もあり、それののちとして、「この時期にいろいろ異なる種類の音を聞かせる必要がある」と主張する者もいる。音楽的表現活動」といふと、歌ったり、奏したりという活動を中心に考える傾向がある。しかし、</p>	<p>保育内容 音楽表現の探究 1987 大畑祥子編著 相川書房</p> <p>繰り返される共通のリズムを楽しんだ。(p.7)</p> <p>緊張している心を解きほぐすには、抵抗感のない活動で身体を十分に動かすことや大きな音をたたり、声をだすことが有効な場合も多く、入園当初にこのような活動が取り入れられます。(p.8)</p> <p>トモ君たちはハリセンであちこちたたきながら、「音」にも気付いたようでした。でもおそらくかれらは「音」だけに注目したのではなく、叩いたときに手に返ってくる感覚や跳ね返る視覚的な面白さなど、すべてを一体にして楽しんでいたのでないでしょうか。(中略)紙を通して感じることでできるすべてに対して体が心が開いている状態だったのでしよう。(p.11)</p> <p>自分の意思とは無関係に音や音声を身体的に知覚することはよくあります。また、音楽が耳に入ると、リズムに合わせて自然と身体が動いたり、メロディーを口ずさんだりする、というのにもよくあてはまります。それは、音楽と人のかかわりの特質のひとつだといえるでしょう。この特質は、曲を共有して一緒にうたったり、踊ったりすることの快感と結びついていられると思われまます。(p.14)</p>	<p>保育内容「表現」2004 黒川建一編 ミネルヴァ書房</p> <p>乳児期の子どもたちの様子を見ていると、まず音や声を感じて聞いてその後で自らもまねして音や声を出そうと試みています。初に音や声を感じる経験があつて、そのあと模倣し、自分の出す声を聞きながら、声の出し方を獲得していくようになります。つまり、聞いて味わったり感じたりすることなしに表現は生まれてこないと言えます。(p.106)</p> <p>人にはみんな個性があり、音や音楽に対する好みも異なります。その音への嗜好はかなり小さい頃から芽生えているようです。(中略)生まれつきの性格や家庭環境の違いによつて、乳幼児が反応する音もそれに対する表現の仕方も違つてきます。(中略)人工の音に囲まれてる現代において、乳幼児が音によって心を動かし、それを表現するということが少なくなっていると思われまます。(中略)歌をうたい始める1~2歳になるまで音を出し、音声を表現する発達させているのです。(p.108)</p> <p>生後わずか5か月と6ヶ月の乳児による声の応答の事例は、生理的模倣や原始的反射といつた生後3か月くらいま</p>	<p>事例で学ぶ保育内容 領域表現 2007 無藤隆監修 浜口順子編者代表 明文書林</p>	<p>演習 保育内容表現 2009 岡健 金沢妙子編著 建帛社</p> <p>生後2か月ごろから、乳児は機嫌のよい時に喃語を発するようになる。乳児にとつては、喉を使う気持ちよさや自分で出した声を聞く面白さがあるのだから、飽きずして声を出している様子は、あたたかみも歌つていようである。(p.75)</p> <p>子どもが1つの楽器の音を、何度も繰り返して聞いていることが、傍目には見えなくても、内面では、「音との対話」とも言うべき集中度の高い営みが行われているかもしれない。やがて、納得のいく音を見つけた時、子どもは満足した表情を浮かべて楽器を置くだろう。その時、子どもにとつてその音は、単なる音ではなく、大げさに言えば新しい世界との出会いである。(p.84)</p> <p>コトリともさせずに緊張と静謐の空気が漂う中で積んでいた積木が音をたてて崩れ、その時それまで体験していた積木の違った側面を体感した子どもたちであつたであろうこととも関係があるかもしれない。(p.121-122)</p>
---	---	---	--	--

<p>音楽的活動の第一歩は、「聞く」ことから出発する。子どもが「聞く世界」は、歌ではない。人がどんな音の中で生活しているのか、声をどんなふうに関心しているのか、日常の生活に目をむけ、そこから音の必要がある。(pp.36-37)</p> <p>声を出すことは心身の解放、発散、快感に通じるものがある。(p.38)</p> <p>5.6 か月を過ぎるころになると乳児は盛んに何かをつかもうとする。つかまえようとして落ちてきたり、手にしたものがたまたま何か当たったりする拍子に音が生じると、その音に興味をもち同じ動作を繰り返して同じ音を聞くこととすることがある。音との能動的な出会いはこのようにして起こる。自分の手を動かすことによって音が発生することを喜ぶ。音を自分の意志で発生させることを楽しむようになる。(p.42)</p> <p>子どもが音に関心をもって楽器やものに向かい合っているとき、音そのものが響き出す世界、リズム、音が鳴る空間へと興味は尽きなく拡がっていく。音を模倣、再現しようとする。音を鳴らしているうちに、音を鳴らす自らの身体に生じるリズムに身をまかせせる。音を奏でる活動もまた身体活動であり知的、感覚活動である。生活環境や自然環境をも音を通して体感してしまふ。異なる音質、音程、身体の強弱や方向、速度によって異なる音の世界、そんな拡がりのある音の世界の一部分でも楽しむことを経験させてあげたい。(p.44)</p> <p>人には順応性が備わっており、環境に自らを合わせて生じることが出来る。私たちの現代の、特に都市部に生活する日本人は天井の低い空間、狭い部屋、間断なく聞こえてくるテレビ、ラジオや車の音、いろいろな生活の音を不思議とも思わない。騒音を騒音と感じない。必要のない音が充ちている日常の音環境に何の疑問も持たず生活をしていく。</p> <p>(P.81-82)</p> <p>本来の静けさは人が何かを期待するとき、何かに夢中になっているとき、また安らいでいるときに生まれる。生きた静</p>	<p>みつちやんの関心が言葉の「音(ひびき)」あるいは「意味」のどちらか一方にとどまっているのではなく、その間を柔軟に行き来しているように感じられるのではないだろうか。(中略)そこからいろいろなイメージを感じ取って表しているのではないだろうか(p.36)</p> <p>大人の見方からすれば、ある程度明確な「意味」をもつ言葉と、そのような「意味」をもたずに音のひびきを楽しむようである。しかし実際には、これらははつきりとして区別できるものではないようです。「音」と「ひびき」のイメージそのものが「意味」であるような「ウンチャゲ」の例を挙げた。(p.36)</p>	<p>での本能的な感度は明らかに違うものです。(中略)2人の場合は「まねしよ」と思っただけのような音質の音を出してはいるのではないのです。いわば反響しないではないの感度で自然に引き出されてきた感度表現と呼ぶべき点は、相手を発しながら出す音が相手の出した声の質と自然に似てしまふという点です。(p.110)</p> <p>楽器を手にするよりもずっと早い時期の乳児たちでさえ、生活の中に各自の好きな音があつて、その音を繰り返して出して楽しんでいっています。(p.115)</p> <p>茶わんを叩くと、それも机の上においたままではなく持ち上げると、きれいな音が出るといふことにB児は気づいたのです。(中略)その後、B児は家庭で2人の男児と共に、棒で鉄棒を叩き、鉄棒に耳をつけて音を聞いて遊んでいました。(中略)こんな音探しや音の発見の経験は音に対する聞く耳を育てるものだと思います。音が生活の中にあふれている現代においてこそ、特に大切な体験だと思つて。そしてこのように叩き方によって違う音が出るのだから、ということに気づくことにもつながるのではないだろうか。そして、自分はこの音が好きだから、こんな音を出したいと思つて、出したい音を出そうとする。音の表現の根底には耳を澄まして音を聞く体験がなくては、ただガチャガチャ楽器を鳴らすだけになつてしまいます。(p.116-117)</p> <p>たとえば音に対して、いろいろな音を発見しおもしろがることから、好きな音へのこだわりをもつ感覚を子どもの中に育てたいと思います。よく聞いて感じる、味わうといったところから出発しないと、外へ向けて表出すること、つまりうたつたり楽器を鳴らしたりするばかりでは表現力のセンスは磨かれたい。(p.124)</p>
---	---	--

けさ、静寂ということができる。子どもが何かに集中しているときは、身体中の神経がそこに向かっている。思い、感覚、力が一心に1つのことに向かい、込められて入る。そこに本来の静寂がある。そのとき子どもが感じている充実感は何にも替えられない。(p.83)

乳児は相野に入るもの手に触れるものは何でも周囲の大人が根負けするほどの興味と探究心と集中力を示し、手当たり次第に叩いたり破ったりする。その興味の中には音への好奇心を示す部分もある。反応を見れば次々と対象物を代えていく様子は、あたかも音の違いを確かめながら楽しんで見ように見える。(中略)音の速さや、リズム、強弱等に興味をもつたり、何度も何度も発見と試行を繰り返しながら、音の世界への興味は深まりと広がりを見せていく。(p.138)

人が生活の中で奏でる音は、その姿と共に情緒的な響きをもって子ども心に染み込んでいく。台所の音は漂ってくるおもしろい匂いを伴うだけでなく、その家庭の情緒的な温もりも包み込まれている。(p.139)

生活の音は、都会と田舎ではかなり異なってくる。それらは幼児の感性の育ちとも深いかかわりをもっている。(p.140)

子どもたちは「～の音みたい」といってそれらしい音をつくるのが好きである。試行錯誤しながら創造していくので、自由に素材に触れるようにしておくことや、時間をたっぷり確保しておくことや失敗が許される場であること、幅広い素材が用意されていることが重要である。音のコーナーは子どもたちが好きなコーナーの1つである。楽器も常時同じものを置くのではなく、子ども遊びが発展しそうな物を用意するとよい。(p.140)

子どもの音楽活動として大人のオーケストラ的な活動を目指しがちになるが、子どもの発達段階に適した活動を目指すべきである。十分に心にひびく体験を子どもができるようにその環境を整えることである。(p.142)

遊びの中で楽しい音の活動が展開できるような環境を整えるように努力をしたい。子どもたちの生き生きとした音への興味

<p>や活動は遊びの中で行われていることが多い。見逃しがちであるので、保育者自身も感性を磨く努力を怠らないように、子どもと共感できることが必要である。(p.142)</p> <p>音の活動にしても、音を1つの手段として子どもが内面を語っていることが多い。保育者にはその語りかけを理解し、応じる必要が期待されている。それには音や体の動きや色彩など美しい物に対する豊かなセンス、感性が育つように、本物にふれる機会を多く持つ努力をした方がいい。(p.143)</p>				
--	--	--	--	--

表3 「音楽-子どもイメージ」の関係についての記述

<p>高杉自子・森上史郎 監修 演習保育講義10 保育内容 表現1996 森上史郎・吉村真理子・飯島千雅子編著 光生館</p> <p>(子ども達が作った制作物に対して)それらのもののおかげで次々とイメージがふくらみ、よりおもしろく遊びが展開する(p.29)</p> <p>耳にして跳ねずにはいられないし、お星がキラキラでは両手を高く上げてキラキラさせる。3歳児で燕の歌をうたったら、子どもたちがみんなつばめになって部屋から飛びだしてしまっただけのこともある。(p.30)</p> <p>バスに乗ったつもりで大型バスに乗ってます>>というたいなから身体をゆする。(中略) <ぞうさん>の歌をうたいながら、象のまねをして歩く子どももいるであろう。自分たちの習い覚えたすべでのものを遊びに投入しているの。つまり、遊びをよりおもしろくするには、経験の豊かさが不可欠であり、さまざまな表現手段を身につけていることが必要であろう。(p.34-45)</p>	<p>保育内容 音楽表現の探究 1997 大畑祥子編著 相川書房</p> <p>子どもたちは、これまでの経験を経験を総動員しながら、卒園式の入場行進にふさわしい音楽を選んでいきます。(中略) 子どもたちは、卒園式での歩き方というものに対して、はつきりとしたイメージをもったようでした。この活動は、こころした子どもたちがもっている動きのイメージによって推し進められており、まさに、音楽とともに「動く活動」そのものであったといえるでしょう。(中略) ここで注意しなければならぬのは、音楽と身体的な動きとの間に、どこまで必然性をもたせられるか、ということ。音楽を台図として利用し続けられる、子どもたちの鋭敏な感性を鈍らせてしまうことにもなりかねません。音楽と動きの関係を形骸化させることなく、豊かな「動きのイメージ」を獲得させていきたいものです。(p.30-31)</p> <p>音は聴覚によって知覚されますが、他の感覚と切り離された形で体験できるわけではありせん。聴覚が与えた音は、その時の身体的・精神的状況、あるいは視覚や触覚、嗅覚などが与えた諸感覚と一緒に体験され、音のイメージとして記憶されます。この音のイメージは成長とともにさまざまに体験をすること、更新され続けていきます(中略)個人的な体験を通して替えられる音のイメージは、</p>	<p>保育内容「表現」2004 黒川建一編 ミネルマガブ書房</p> <p>どのような表現においても心の動きと切り離して考えることができないことがはつきりしてきてきたと思います。(p.121)</p>	<p>事例で学ぶ保育内容 領域表現 2007 無藤隆監修 浜口順子編者代表 明文書林</p> <p>子どもたちは音楽を聞いていて、一人て舞台上に立つのは心細い子どもたちもおそろいの衣装を身に付けて、音楽に合わせておどるところで人魚になりきれていた。(p.156) 子どもたちは隣く間に自分たちもシートの絵を描き、それを映してピアノを弾く。その映像に誘われてピアノを弾きはじめる子どももいる。2学期にみんななでうたった歌だった。音楽を聞いてみると、子どもがいない。音楽を聞いて思わぬ絵を描きだす子がいる。そうして映像と音楽が互いに次の表現を生み出していく。(p.173)</p>	<p>演習 保育内容表現 2009 岡健 金沢妙子編著 建帛社</p> <p>イメージが豊かになると、子どもたちはイメージを操作して遊び、想像力を駆使した見立てやごっこ遊びを展開させる。(p.47)</p>
--	---	--	--	---

	<p>基本的に人によって異なるものなものです。(p.82)</p> <p>音のイメージはあくまでも個人的なものですが、時代や社会と無関係なわけではないのです。(p.83)</p> <p>音の響きは物理的な性質として知覚されるだけでなく、さまざまな感覚や思考、状況に支えられて体験化されます。そのため体験によって各人がもつ音のイメージも、かなり複雑で重層的なものとなるのです。(p.83)</p> <p>一見、意味をもたないように感じる言葉であっても、それが子どもたちの間でやりとりされ、何度も繰り返される場面を目にすると、その言葉のひびきを楽しんでいるとともに、そこから喚起されるイメージを伝え合い、面白がっているようにも感じられます。(p.84)</p> <p>子どもたちもまた、自由な連想によって、日常生活を歌で満たしています。それが意識的なものであれ、無意識的なものであれ、そこには何らかのイメージが在介しているはずです。(中略)言葉や形などの連想によって引き起こされた活動を繰り返すうち、子どもたちの内面では、もはやことと音楽とが、イメージの次元で結合していくのでしよう。(p.88-89)</p> <p>音楽に対する共通感覚的なイメージは、個人に固有のものであると同時に、文化的・社会的影響からも逃れることができなという、相反する二面性をもっていると考えられます。(p.41)</p> <p>子どもはお母さんの働いている情景をうたった歌からお父さんの働いている様子にもイメージを広げて、子どもなりに歌をつくりかえて楽しんでいきます。(p.79)</p>			
--	---	--	--	--

表4 「音楽—子ども—表現」の関係についての記述

<p>高杉自子・森上史郎 監修 演習保育講座 10 保育内容 表現 1996 森上史郎・吉村真理子・飯島千穂子編著 光生館</p> <p>【歌うこと】 歌を全部覚えてうたえるようになると、さげんの民いときには、はなうたをうたったり、花を見るときにうたいたいという。子どもの身体と気持ちには自然に身体がたいので、うたうときには自然に身体が</p>	<p>保育内容「表現」2004 黒川建一編 ミネルヴァ書房</p> <p>【歌うこと】 喃語に抑揚がつくようになって歌のよなものが生まれってきます。(p.109) 既成の歌の一部を気に入って、その部分だけをうたう様子はよく見かけます。(中略)曲の中で歌詞がおもしろく気</p>	<p>事例で学ぶ保育内容 領域表現 2007 無藤隆監修 浜口順子編者代表 萌文書林</p> <p>【歌うこと】 子どもが好きな遊びに入り込み、開放的な気持ちになると、歌が自然に生まれてくることがわかる。(p.88) 特徴的な事は、(中略)活動の繰り返しですが、歌と一体となっている点である。「行く</p>	<p>演習 保育内容表現 2009 岡健 金沢妙子編著 建帛社</p> <p>【歌うこと】 ちよつとした秘密の共有を、こうしした即席の創作歌とスキップなどの動きで身体表現している。(p.71) 言葉が発するようになると、大人が歌うのに合わせて部分的に声を出すようにな</p>
--	--	---	---

<p>リズムや歌詞に反応する(p.30) ときおり乳児はキョッキキョッキと声をあげ、声を発することを楽しんでいる。2、3か月ごろから、1人でいるときも声を出し、そのことを楽しんで見ている。子どもが即興的に泣くように歌う歌を聴いていると、最初は2つの音をいろいろにつないだだけの旋律だったものが、成長とともに1つの間に、音域が広がったり、やがて意図的なリズムが生まれてくる。(p.39)</p> <p>声を出す、音程を調整する、歌を歌うためには、身体や感覚などの諸機能の参加が必要である。子どもが歌う歌では、音程、リズムなど音楽的に正確でないところがあつたり。そのような場合のほとんどは、耳で聞いている音程やリズムを再現して歌おうとしても、身体がリズムを再現して歌おうとしないために思うように歌えないという結果である。(p.40)</p> <p>K君のおおあさんは、K君が歌が好きではないと思いつく、少なからず心配していた。みんなと一緒に歌ったりするときには、みんなも歌わなから抵抗しているように見受けられたのである。ところが、あるとき公園で遊びながらK君が喜々として歌っているのを見た。それで、「ああ、うちの子も歌が嫌いじゃないんだ」と安心したという。(p.42)</p> <p>【器楽演奏】 音の活動、表現は歌うこと比べて、より意識的な活動と言えらるかもしれない。音にしようとする動機、誰かが鳴らした音への興味、生活の中で身体に入ってくる音が何か結びつきを求めているとき、そこには精神の意識的な活動がともなっている。鳴らす素材を選択し自分の中にある音を求めようとする意志が働いている。(p.43)</p> <p>何かの音を鳴らすことは、身体の手、足、息等を使うことによって自分自身の音を出すこと、音を奏すること、音を奏すること、その音の発声を楽しむ活動である。(p.43) この子どもは音によって自分の思いを表してくれたように思う。子どもが内面にこんなにすばらしいものが秘められてい</p>	<p>文化の側面とは別の側面に興味をもち、それを遊びの中で子どもなりに再現することがあります。(p.16)</p> <p>私達は先ず何よりも子ども自身が音楽の「つくり手」であり「にない手」であるや環境など外界の出来事に敏感に反応し、そのことを理解します。友達や保育者となら、一瞬一瞬において子ども自身も全身で歌を味わっている、さまざまに表現的と思われ、そこから立ち表れ、すずでもっている知識を参照しつつ、歌をつくりかえたり、別の歌となつたり受け取っているのだと考えられます。(p.80)</p> <p>自分で体感しているリズムに合う言葉を探して唱える、という音楽的な能力の育ちも面白さが増え、子どもたちが一体感を味わっていたように思われます。(p.113)</p> <p>子ども自身になりたいたい、という目当てがもてたとき、そのための工夫はむしろ喜びを高めるのです。(P.117)</p>	<p>入って、うたいやすいところからうたい出すよう。一番印象に残っている出ずのこともありません。身体を揺らし拍子やリズムを刻み、ずっと一緒に心の中でうたっていたのだから、その音楽を感じ取る力には驚かされます。(p.111)</p> <p>子どもが2~8歳になったころ、耳に入ってくる歌を模倣したメロディーや音響的なメロディーの断片の中から好きなメロディーを選んで組み合わせ、即興的にうたうことを楽しむようになり、この時期の自発的な歌唱表現は誰にも教わるのではなく自然に多くの子どもの獲得していき、表現であり、音楽表現の原点ともいえるでしょう。(p.113)</p> <p>「つぶやき歌(自発的で即興的な歌)」は子どもが何かに夢中になっているとき、つぶやき歌を歌う時、声はどなり声から程遠く、柔らかな自然な声です。(p.113)</p> <p>子どもはよく聞き慣れた歌からうたい出す。(p.114)</p> <p>うたうことは楽しいことだと感じていて、子どもは、よく歌を口ずさむようになるでしょう。(p.121)</p> <p>3歳を過ぎる頃から、うたつてと言われれば少し意識したり緊張してうたつたりもします。4歳になるとかたりむずかしい歌や長い歌を覚えてうたうこともできます。そして次第に仲間と声を合わせる喜びをかんじながらうたえるようになり、照れや変な声を出したりする子どもが出てきますが、それらもみんな子どもの来歴の表れ、すなわち表現です。(p.122)</p> <p>【身体表現】 まだ寝返りができないうちは自由に両手や足を動かします。そして座れるようになると足は身体を支えているので動かさなくても、上半身を上下に</p>	<p>「戻る」という活動のリズムが重なるようにして歌と活動をくり返すこと自体が楽しさを帯びてくる。(中略)つまり「子どもは遊ぶ活動状況と深く結びついている」(古賀・無糖・伊集院, 1998)だといえる。(pp.83-84)</p> <p>みんなと声を合わせることで、より大きな楽しさや一体感を味わうことができる。(p.84)</p> <p>【器楽演奏】 この事例では、「意外」にも、ふだんハントベルなどとはおおよそ関係がないように見えた男児たちの音楽表現を見て取ることができる。むしろ、こういう音楽表現もあるのか、というような、ひそやかに、びんとははつめた緊張感、きつかけ、充実した演奏である。偶然のまつた演奏なのだ。心のどこかで、鳴らした演奏などという達成感に一つ、鳴らしてみたいと思っていた楽器に触れ、しかも、友達と心を合わせて一つの曲を奏するということに保音者がいじやかな表現活動だ。(p.125)</p> <p>【身体表現】 初めて舞台の上立ち不安でいっぱい、おどりの曲が挿入されたことで、音楽に動きが引き出され、曲に乗ってみんなといっしょにおどりにまわっていた。(p.159)</p> <p>【その他】 園生活の中で子どもたちは、色、形、音(音とリズム)、動き、手触りなどのさまざまなものを表現して味わうという活動もある。(中略)子どもはそれ遊びに取り入り、味わうこと、それ自体を遊びとして楽しんだり、それは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった五感を通してからだ全体で感じられるものになる。そして、そのよきな経験の中で子ども自身も形をつくり、歌を歌ったり、からだを動かしたり、知らず知らずうちに表現</p>	<p>り、2歳前後には簡単な同様の一部を口ずさむ。断片的な言葉のようだが、気持ちと一緒に歌っているのだから。(p.76)</p> <p>子どもは、2歳ごろから、よく思いのままに歌を歌って表現する。それは描画や「なぐりかき」のようなものであり、他者に向けて何かを伝えようという意識は薄い。(p.82)</p> <p>歌うことにより仲間と一緒に喜びや力強さを感じ、自分たちの歌声に励まされたのではないだろうか。(p.107)</p> <p>【身体表現】 単に音楽に合わせて体を動かすだけでなく、歌詞にある「悲しい>>>、苦しい>>>、泣きたい>>>、笑っちゃおう>>>」などの意味が体験としても分かって、体ごと表現して楽しんでいた。(p.56)</p> <p>何気ない日常の1コマだが、身体で捉えたリズムを的確に表現していることに感心させられる。リズムを通して協同的な音楽表現が行われていることも興味深い。(p.77)</p> <p>【その他】 クラスで歌ったり、合奏したり、リズム遊びをしたりすることは、集団生活でしか味わえない音楽の表現である。そこで体験した音楽や表現方法は、自分たちが体から出す音楽表現の「材料」となる。(p.80)</p> <p>書き留めておけば、またはサキにとどめて、その曲が完結性をもった「作品」として認識されているということである。自分の表現を対象化できるようになると、表現方法を工夫や技術の修得に関心を向けるようになる。「もつと上手に弾きたい」「もつと面白くしたい」と思うのである。それが、自ら技術指導を求めたり練習したりする態度になる。(p.88)</p> <p>年長はこの時期(5歳児2月)にもなる、自分だけの表現で満足するのではなく、仲間と一緒に表現することの喜びを感じるようになる。客観的に、自分や仲間の表現を感じ、評価する力も付いてくる。だからこそアンリは自分の思いを貫くのではなく、トシカズは言葉によってみんなが楽しめることを選択し、ハナヨの歌にすと言ったのだから。(中略)また、</p>
--	--	--	---	--

たとは予期していなかった。一気に噴出したこの子どもの表現である音の世界の展開に、この子に内在する感性のすばらしさを知った。(p.139)

【身体表現】
リズムについていえば、身体の動きが耳で捉えたリズムに合うようになるのは、2歳になってからであり。歌に合わせて手を叩いたり、リズムに合わせて歩くことができるようになる。(p.31)

3歳を過ぎればスキップができるようになり、跳ねるリズムを自分の身体で体験できることがうれしくたまらないうようである。軽快な曲をピアノで弾いてやると、それが遊びであるかのようにスキップをして楽しんでいく。(p.31)

母体から外界に生まれ出た時から、身体全体を使い音声を存在を表現している。(p.35)

【器楽演奏】
音の活動、表現は歌うことと比べて、より意識的な活動と言えるかもしれない。音にしようとする動機、誰かが鳴らした音への興味、生活の中で身体に入っている音が何か結び付きそれを表そうとするとき、そこには精神の意識的な活動がともなっている。鳴らす素材を選択し自分の中にある音を求めようとする意志が働いている。(p.43)

何かの音を鳴らすことは、身体の手、足、息等を使うことによつて自分の意図する音を発すること、音をつくり出すこと、その音の発声を楽しむ活動である。(p.43)

【その他】
乳幼児期における音楽的表現は、日常生活のあらゆる場面に見ることができ。また、音楽的表現の成長・発達には1人ひとりの子どもにそれぞれ異なつて表れる。(p.36)

揺らしたり、左右に揺れたり、頭を振ったりします。楽しい音楽が聞こえてきたときまわりで誰かが踊っているとき、なんとなくうれいときなどに身体が自然にうごくようになります。身体の使用機能をその時々に応じて使っていきます。(p.117)

2歳頃から保育者のまねをしながら動きを伴うわらべ歌や遊び歌で楽しんで、3~4歳くらいになるとスキップで飛び回り楽しさを表現している様子がよく目にします。このような自発的で即興的な動きの表現をしている様子を見てみると、これらがいろいろなダンスの表現につながっていくのだからという気がします。(p.117)

まだことばを充分に獲得できていない乳児たちが、好きな音楽や歌やことばの刺激に対し、満面に笑みをたたえて全身を揺らしてその楽しさを表現している様子はよく見かけます。なんとなくララックスして楽しいときも、そうでないときも、心が解放されていて身体に力が入らず、くつろいだ状態にあるということとは共通しています。(p.119)

ある幼稚園の異年齢混合のクラスで、子どもの要望で保育者がCDをかけるのと、子どもたちが自由に即興的に踊り出した。その中で1人だけ踊らないでじっと友達を見つめて立っている3歳の女の子がいたが、後ろに隠すようにしていた手の指先を曲に合わせて動かしていった。という事例より、みんなと同じにできなくても心の中で音楽を聞き、楽しんでいることもあるのだということを学んだ事例でした。よく目につく表現だけを見てはいけないうです。(p.120)

【その他】
しつかり聞いて感じて、子ども自身のところを通過した後に出てきた「表現」だけが、それを受け止める側のところをぶるわたるのだと思います。(p.124)

を行つているといえる。周囲のものを味わう感性の豊かさが表現することの基礎となるのである。(p.92)

このエピソードの背景には、仲間としての音があるからこそ、トシカズはアンリを傷つけず、しかもアンリが納得して受け入れられるような言葉を用いることができたのだから。一方、仲間関係の音もトシカズの言葉から、自分のつくつたメロディーとハナヨのつくつたメロディーを客観的に比べ、自分で評価し選択することができたのだからと考える。(p.109)

歌や楽器による音楽演奏は、子どもたちの身体に同調を喚起する。知っている歌や楽曲の演奏が聞こえてくるといつのまにか歌いだしたり、思わず身体でリズムを取ったりしてしまふことは少なくない。(p.113)

表5 教科「音楽」(第1学年及び第2学年の目標と内容)における「聴くこと」に関する記述

A 表現	器楽	音楽づくり	鑑賞
<p>低学年の歌唱活動では、聴唱・視唱の能力、音楽を感じ取って歌唱の表現をくふうする能力、楽曲に合った表現の能力、声を合せて歌う能力を育てていくことが指導のねらいとなる。(p.22)</p> <p>ア 範唱を聴いて歌ったり、解明で模唱したり暗唱したりすることは、聴唱・視唱の能力を育成するために、模唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする内容を示したものである。低学年では、他の人の声を注意深く聴かないで、むやみに大きな声で歌ったり、自分勝手な速度で歌ったりする傾向が見られる。(中略)音楽を聴いて演奏する能力は、様々な音楽活動の基礎となるものであり、低学年の実態を踏まえてしっかりと「模唱」とは、教師力を育てる必要がある。ここでいう「模唱」とは、教師や友達がつたうのを聴いてまねて歌うことを指している。(p.22)</p> <p>エ 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合せて歌うこと。この事項は、声を合せて歌う能力を育成するために、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合せて歌う内容を示したものである。このような低学年の時期には、歌唱の活動を通して正しい音程やリズムなどに対する感覚を身に付けていくようにするとともに、伴奏の響きをよく聴いて歌う活動を通して、調和のとれた歌唱の表現をするための素地を養っていくことが大切である。(p.24)</p> <p>エ 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合せて歌うこと。この事項は、声を合せて歌う能力を育成するために、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合せて歌う内容を示したものである。このような低学年の時期には、歌唱の活動を通して正しい音程やリズムなどに対する感覚を身に付けていくようにするとともに、伴奏の響きをよく聴いて歌う活動を通して、調和のとれた歌唱の表現をするための素地を養っていくことが大切である。(p.24)</p>	<p>低学年の器楽の活動では、聴奏・視奏の能力、音楽を感じ取って器楽の表現を工夫する能力、楽曲に合った表現の能力、音を合せて歌う能力を育てていくことが指導のねらいとなる。(p.25)</p> <p>低学年では、音楽を聴いて自分も同じように演奏したいという思いや願いをもつて、打楽器、オルガン、ハーモニカなどの楽器を用いた演奏に親しみながら【共通事項】との関連を十分に図り、楽しい器楽の活動を進めることが大切である。(p.25)</p> <p>ア 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。この事項は、聴奏・視奏の能力を育成するために、範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する内容を示したものである。低学年では、範奏を聴いて楽しんで演奏しようとする傾向が見られる。(中略)聴奏の能力は、様々な音楽活動の基礎となるものであり、低学年の実態を踏まえてしっかりと聴奏の能力を育てる必要がある。(p.25)</p> <p>エ 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合せて演奏すること。この事項は、音を合せて演奏する能力を育成するために、互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合せて演奏する内容を示したものである。(中略)「互いの楽器の音や伴奏を聴いて」とは、自分の音だけでなく友達の音や伴奏を聴きながら演奏することを意味している。(p.27)</p>	<p>低学年の音の音楽づくりの活動では、さまざまな特徴に気付き、音楽の構成を育んでいくことが指導のねらいとなる。これらのねらいを達成するために、耳を聴き、音の出し方を合わせ、工夫し、音楽の仕組みに着目してそれらを手掛かりに音をしていく活動を行うことが大切となる。(p.27)</p>	<p>鑑賞</p> <p>低学年の鑑賞の活動では、楽曲を全体にわたって感じ取る能力、楽曲の構造を理解して聴く能力、楽曲の特徴や演奏のよさを理解することや感じ取ったことが指導のねらいとなる。(p.30) 楽曲を聴いて想像したことや言葉で表すなどして、楽曲や演奏のよさに気付くようにしながら、【共通事項】との関連を十分に図り、楽しい鑑賞の活動を進めることが大切である。(p.30)</p> <p>ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。ここでは音楽を部分的に取り扱ったり、分析的に指導したりするのではなく、常に楽曲全体を味わい、音楽を聴くことに親しみをもつようにつづることが指導のねらいとなる。</p> <p>イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。低学年では、音楽を形づくっている要素に興味・関心をもち、注意深く集中して聴く習慣を身に付け、音楽を聴く楽しさを味わうようにつづることが求められる。(以下ウに関する記述) 低学年では、児童が音楽を聴くことに親しみをもつようにつづることが求められる。その際、音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを教師や友達など身近な相手に伝えようとする気持ちを育てることが大切である。(p.30)</p> <p>鑑賞教材の選択に当たっては、児童が音楽を身近に感じることができ親しみやすい楽曲を選択し、音楽への興味・関心を深めるようにする必要がある。(p.31) 一つ一つの楽器の音色あるいは人の声の特徴を聞き取りやすく、楽器の演奏の仕方に興味・関心を持つことのできる楽曲などを教材として選択することが大切である。(p.32)</p> <p>【共通事項】は、表現及び鑑賞のすべての活動において、共通に指導する内容を示したものである。指導に当たっては、表現及び鑑賞の各活動の中で指導し、【共通事項】に示す内容のみを扱う学習にならないように配慮することが必要である。</p> <p>ア 音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)(イ)を聞き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。</p> <p>(ア) 音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽の特徴を付けている要素 (イ) 反復、間いと答えなどの音楽の仕組み(p.33)</p> <p>指導に当たっては、表現及び鑑賞の各活動において、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聞き取りやすい楽曲を教材として選び、それらの働きが生み出す音楽のよさや面白さ、美しさなどを感じ取ることができるよう指導を工夫する必要がある。(p.34)</p> <p>イ 身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。音符、休符、記号や音楽にかかわる用語の指導については、単にその名称や意味を知ることだけでなく、表現及び鑑賞の様々な活動の中で、児童がその有用性を実感しながら意味や働きを理解し、表現及び鑑賞の各活動に用いていくようにすることが重要である。(p.34)</p>